

ユーザー訪問 わたなべ調剤薬局 (東京都千代田区)

「ミスゼロ子」と「ミスゼロ子 Camera」で 薬剤師の心理的な負担を大きく軽減

東京・日比谷のオフィス街に立地するわたなべ調剤薬局には、多忙なビジネスパーソンが数多く来局する。同薬局で大活躍しているのが、クカメディカルの提供する調剤過誤防止ピッキングシステム「ミスゼロ子」と「ミスゼロ子 Camera」。調剤ミスを限りなくゼロにし、薬剤師に安心感をもたらしている。

多忙なビジネスパーソンの利用が多い

わたなべ調剤薬局は、雅ファーマシー株式会社(本社:東京都千代田区)が経営する2店の調剤薬局の1つで、オフィス街のビルに入居している。同じビルに入居する7つのクリニックからの処方箋とともに、大学病院や総合病院などの処方箋も持ち込まれる。近隣ビル街で働くビジネスパーソンの利用が多く、夕方から夜にかけての時間帯が混雑する。処方箋応需数は1カ月に3,000~4,000枚で、備蓄医薬品目数は約1,600品目、常勤薬剤師8人、事務4人で運営している。

代表取締役で薬剤師の渡邊雅尋氏は、勤務する薬剤師に対して「医療を担う一員としての自覚」を求めているが、その気持ちがあればほとんどの問題は解決できると話す。

「都心部の店舗ですが、在宅医療にも対応しています。また、備蓄品にない特殊な薬が必要な患者さんに対しては、薬剤師会などを通じて入手できる店舗を探し出し、素早くお渡しできるように手を尽くしています」(渡邊氏)

音声付きの動画で確認できる安心感

わたなべ調剤薬局では、薬剤師のミスを減らすとともに効率的に業務を運営する観点から、さまざまな機器やシステムの導入を図ってきた。そんななかで、2017年12月にクカメディカルが提供する調剤過誤防止ピッキングシステム「ミスゼロ子」(ハンディ端末3台)、翌年1月に「ミスゼロ子 Camera」(5台)を導入した。

「展示会で資料を手にとったのがきっかけです。クカメディカルの本社がある奈良市まで出向き、実際の機器に触れながら説明を受け、導入を決めました」(渡邊氏)



渡邊雅尋氏(左から2人目)とスタッフの皆さん



わたなべ調剤薬局で活用されている「ミスゼロ子」と「ミスゼロ子 Camera」

わたなべ調剤薬局では、調剤業務を静止画で記録していたが、投薬後の結果確認しかできなかったため、「ミスゼロ子」と「ミスゼロ子 Camera」を組み合わせて使用している。

同薬局での調剤業務は来局者に渡す番号札に付いているバーコードを「ミスゼロ子」のハンディ端末で読み取るところから始まる。次に全自動薬剤払出機によって用意された薬剤のレシートに記載されているバーコードをハンディ端末で読み取る。この時点で間違いがあれば、すぐにわかる仕組みだ。

「『ミスゼロ子』の導入時は、バーコードの読み取りが面倒ではないかと心配しました。でも実際に利用してみると、すぐに慣れることができ、読み取り作業によって時間がかかることもありません。何よりピッキングの間違いがほとんどなくなりました」(渡邊氏)

加えて威力を発揮しているのが、「ミスゼロ子 Camera」である。小型カメラが投薬カウンターに取り付けてあり、音声入りの高画質動画で録画される。薬品名はもちろん、薬情、薬袋、処方箋、領収証などを全て確認でき、静止、拡大、印刷もできる。

「薬剤師なら誰でも『あの説明、ちゃんとしたかな』と、患者さんが帰られた後に心配になった経験があると思います。そういう時は『ミスゼロ子 Camera』の動画でしっかり確認します。万一、説明が不足していれば、電話でフォローしています」(渡邊氏)

また、まれに患者の勘違いで、数量が間違っていたのはいかという問い合わせがあるが、これも動画ではっきり確認できるので対応がしやすいという。

「投薬担当の薬剤師は、患者さんの表情や言葉に注意を払いながら、服薬指導をすることが大切です。その時に、調剤ミスを気にしていると、集中力を欠いてしまいます。『ミスゼロ子』と『ミスゼロ子 Camera』の導入により、薬剤師の心理的な負担を大きく軽減できました。バーコードの付いていない錠剤の錠剤を扱う時など、ミスゼロ子を使うにあたっての注意点はありますが、そこさえ押さえておけば、これほど安心できるツールはありません」と渡邊氏は話す。

*本稿の取材は、マスク着用、換気、三密防止など、十二分に配慮の上、実施しました。